

内村全集の索引製作を終って

山本先生の編集になる教文館版内村鑑三全集が、近く発行される総索引巻をもって、完結することになりました。この機会に、索引制作を担当したもののひとりとして、その経緯の一端を申し述べ、教友各位のご加禱に対する感謝のことばとしたいと存じます。

信仰著作全集第二十五巻に当るこの索引巻は、聖書注解、信仰著作、日記書簡の三全集全四十九巻のために作られたもので、事項（引用図書検索を含む）、聖句、標題の三索引から成っています。（総索引巻には、このほかに、山本先生・滝沢信彦氏共編の年譜と系図がついています。）このうち、標題索引は菅原栄氏の制作で、あとの二つをわたしが担当いたしました。

本全集の第一回配本は、聖書注解第八巻マタイ伝で、一九六〇年七月五日発行ですから、ちょうど五年半の日子を要したことになります。この間に、わたくしどもの作ったカードはおよそ十二万枚、原稿用紙にして二千数百枚にのぼりました。索引巻の頁数は、年譜その他も含めて、八百頁近いものになるようです。

山本先生から、はじめてこの仕事のお話があった時は、実はわたくしも、これがこんな大仕事になるとは考えてもいませんでした。

というのは、当初は聖書注解全集十七巻の刊行しか予定されていませんでしたし、それにわたくし自身、索引を作るといったことがどんな仕事なのか、かいく見当もつかなかったからです。なにぶん、わたくしは索引を使って本を読み、研究をするといった経験のない人間です。そういう人間が索引を作る方にまわったのですから、考えてみれば大それたことでした。山本先生に、それこそ索引のイロハから教えていただいで、仕事を始めたのですが、忘れもしません、マタイ伝注解巻を数十頁やった頃には、その仕事の大へんなことと難かしさに驚き、途方に暮れたことでした。しかし、始めてしまったものを途中で止めることもならず、無我夢中で巻一卷とつづけ、何とか聖書注解十七巻の索引を作りあげました。一九六一年の暮れのことです。

ところが、この全集が進行している間に、信仰著作全集の刊行が計画され、同全集全二十五巻の最終巻を、聖書注解全集との総合索引巻とすることになりました。此の度は、とうていわたくしをよくするとところではないと考えて、再三お断わりしたのですが、以前の続きだからということ、結局これもおひきうけすることになってしまいました。この全集のあと、ひきつづき日記書簡全集全八巻が出ることになり、これで文字通り内村先生の全著作をもうらす内村鑑三全集となったわけですが、索引は当然これら三全集の総索引ということになりました。

いくら仕事に慣れたとはいえ、あいかわらす、索引の基本的性質について模索しながら、月々に刊行される巻に追われて、くる日もくる日もカードをつくりました。日記書簡全集の最終巻のカードをとり終えたのが、今年の夏七月も終りの頃だったと思います。それから整理、検討をくり返して原稿に仕上げ、九月中旬に出版社に渡すことができました。この最終段階では、特に山本先生のご家族、滝沢信彦氏、奥平富士子氏の全面的なご援助に与りました。これらの方々の絶大な労力提供がなければ、わたくしひとり、今頃もまだぐずぐずやっていたかも知れません。感謝にたえません。なお、標題索引は、菅原栄氏がはじめから単独で担当され、忙しい中に非常な努力をされて、同じ頃完成されました。

次に申し述べることは、主として事項索引に関するのですが、できあがってしまった今、わたくしにとって一番心配なことは、これが果たして索引といえるものかどうか、この索引が果して、これを引く人に内村先生の信仰と精神を正しく紹介する手引きとなり得るかどうか、ということです。なにしろ、索引制作に全く無経験なわたくしが、とうとう最後まで、索引の基本的性質について自分の結論さえ出し得ぬままに、しかも結局我流でおし通してしまつたのですから（他の本の索引を参照しなかつたわけではありませんが、こちらにその知識がないため、ほとんど役に立ちませんでし

た。）、顧みて忸怩たらざるを得ません。

事項検索の場合、問題は、どんな事項を、どの程度とりあげるかということでしょうが、方法の問題は別として、わたくしとしてはどこまでも信仰本位に、「神が内村をもつて日本に始められた全く新しいキリスト教の本質を明らかにし、その福音を日本人に伝える器とするため」（聖書講義二〇六号一〇一頁参照）という山本先生の編集方針に添うよう努力いたしました。しかし事項のとりあげ方など、ずい分奇妙なものもあるかと恐れます。ただ、このいかにも素人くさい索引は、むしろそのために、これを読んでいると、それだけで内村先生がほうふつとしてくるような、ひとつの楽しい読みものになっているのではないかと、秘かに考えております。

こういえばいかにも無責任で、自分の無能をたなあげて言うように恐縮ですが、内村先生の著作にこの種の索引をつけるというところが、そもそも無理なのではないでしょうか。先生の書かれたものは、そのどこをとつても、特定の索引事項に枠づけするには、余りにも自由で、余りにも生命に溢れています。カードを作りながら、わたくしは、しばしば悲喜両様の嘆声をあげざるを得ませんでした。さいわい山本先生の編集じたいが、そのまま索引になっているという親切なものでありますから、各巻末の先生の解説を読みながら、その補助としてこの索引を使って下されば、内村先生の著作に親しむために、幾分のお役に立つのではないかと考えます。なにぶ

ん大部のものなので思わぬ誤りや不注意による間違い、その他不備な点も多いことと思います。教友各位のご叱正をお願い申しあげること次第です。

非力のわたくしが、この大切な仕事を、とにも角にも舞事完成することができたのは、一重に山本先生のご懇篤なご指導と、教友各位の熱いご加禱、更には主の深いあわれみによるものでありまして、心から有難く存じております。

ひとつのことをやり終えた時は、誰しも、感謝と満足と共に、一種の虚しさを感じるものですが、わたくしも今、心の片隅に二つの虚しさを覚えています。その一つは、ちょうど聖書に対して、なくもがなの注解や講釈をしてしまった時の、あの虚しさに似ています。もう一つは、自分の仕事に対する自信のなさに由来するものですが、これについては、「必ずしも完全なるを要せず。不完全なるもまた可なりである。われは毎日毎時、わがなし得る最善をなして、患難多きこの世に少しなりとも慰めと喜びとを供すべきである。」（続一日一生・八月八日項）という内村先生のことばに励まされて、この小さな働きの実を主に委ねたいと存じます。

わたくしは、もともと協会の少教派のクリスチャンとなったものであります。今から十数年前、山本先生編の「宮部書簡」によつてはじめて内村先生に開眼し、以来山本先生に導かれて内村先生の

信仰と精神を学んで参りましたが、このわたくしが、内村全集編集の仕事に参与させていただくとは、ゆめにも思いませんでした。

「善いわざは滅多に知恵や熟慮によつて企てられも、行われもしない。むしろ迷いや無知によつて行われるに違いない。」（ルター・卓上語録）まことに、主は山本先生を通じて、わたくしを「目を眩まされた駄馬のように導かれ」（全上）、この光荣ある事業の一端を担わせて下さったのでした。わたくしの感謝はあふれます。

（山本付記）全集編集の議が起こった時、「ぜひ索引を、そして索引製作には武藤君以外に適任者なし」とわたくしは固く決意しました。武藤君には言葉に現わせぬ迷惑や無理をかけてしまいました。しかしついに厩大な索引、しかも文字や言葉の索引でなく、内村先生の信仰と精神の索引というこの驚くべき索引巻をついに手にすることができた今、同君を煩わしたことが間ちがっていなかったことを知り、うれしさに堪えません。武藤君の寛恕を乞うと共に、天下の読者各位と心からの感謝をささげます。